

事例番号 123 川を活かしたまち再生(徳島県徳島市・新町地区)

1. 背景

徳島市は四国東部に位置する徳島県の県庁所在市(人口 26 万人余)である。四国最大の川、吉野川の河口の三角州上に位置する。天正年間に蜂須賀家政が阿波の国に入って築城したのがまちの始まりであり、市街地は網目のように流れる河川に囲まれた島状の低地につくられた。江戸時代は藍の産地としてさかえ、明治以降は木工業、金属工業などが興ってますます繁栄した。

徳島市のほぼ中央部には、徳島市の都市河川を代表する新町川が北西から北東に向けて横切っているが、その新町川はかつては阿波藍の集積場として南岸に白壁の藍蔵が建ち並ぶ物流の拠点であった。しかし、戦後は阿波藍の需要減や交通体系の変化等により川沿いの経済活動は大きく後退し、さらに昭和 40 年代からは工場排水や家庭排水による川の激しい汚濁も加わって、新町川周辺は発展から取り残された暗いイメージの地区になってしまった。かつては人々の生活、生業の場の中心であった新町川は、現在では繁栄の中心である駅前地区と新町地区とを分断する人々から疎まれる存在に転化してしまった。新町川南岸は、県が地元商店街の要望もあって設置した長大な駐車場の存在ばかりが目立つ、殺風景な風景になってしまった。

他方、徳島市の商業機能は徳島駅前への集積が進み、新町地区の商店街はますます衰退することとなった。新町川の二筋南側にある東新町商店街ではデパート誘致を核とする再開発を計画したものの、バブル崩壊で頓挫してしまった。同商店街に立地していた百貨店も撤退してしまっ

2. 目標

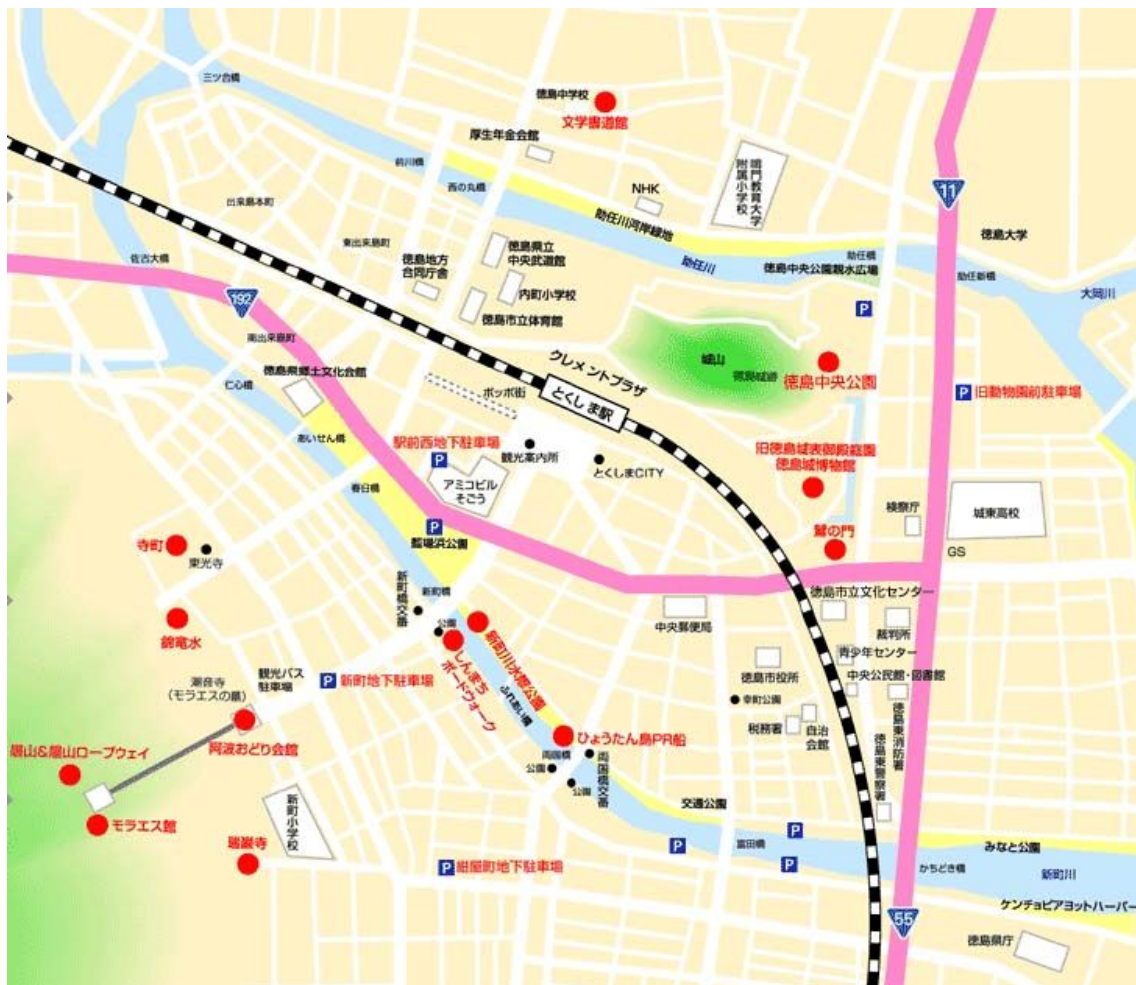
「水が生きているまち・徳島」が目指されている(「ひょうたん島・水と緑のネットワーク構想」)。徳島市は吉野川をはじめとする大小さまざまな川が横切り、徳島駅や市役所のある市中心部も新町川とその支流とによって囲まれた中州になっている(地元ではその形から「ひょうたん島」と呼ばれている)。このような豊かな自然環境の中にある市の基本構想では、都市づくりの基本理念を「自立と共生の中に新しい豊かさを創造する市民参加型都市」としており、特に川を生かした都市づくりが志向されている。

3. 取り組みの体制

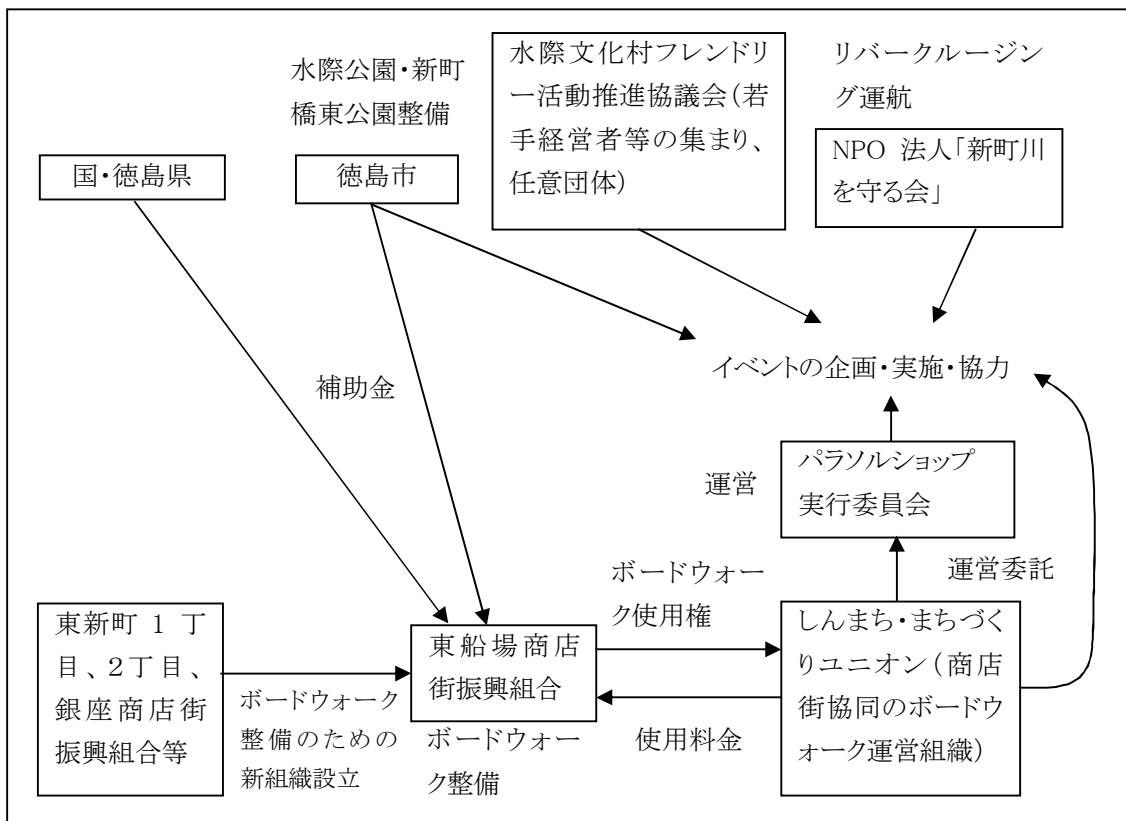
行政、商店街振興組合、市民組織等の協働により川を生かしたまちづくりが進められている。行政以外の主な主体には、「東船場商店街振興組合」(ボードウォーク整備のための団体)、「しんまち・まちづくりユニオン」(周辺商店街の集まり)、「ボードウォークパラソルショップ実行委員会」、「水際文化村フレンドリー活動推進協議会」(若手経営者等のイベント集団)、NPO 法人「新町川を守る会」等がある。



徳島市地図 (資料:徳島市)



徳島市中心部地図 (資料:徳島市)



新町川を生かしたまちづくりに関わる諸組織

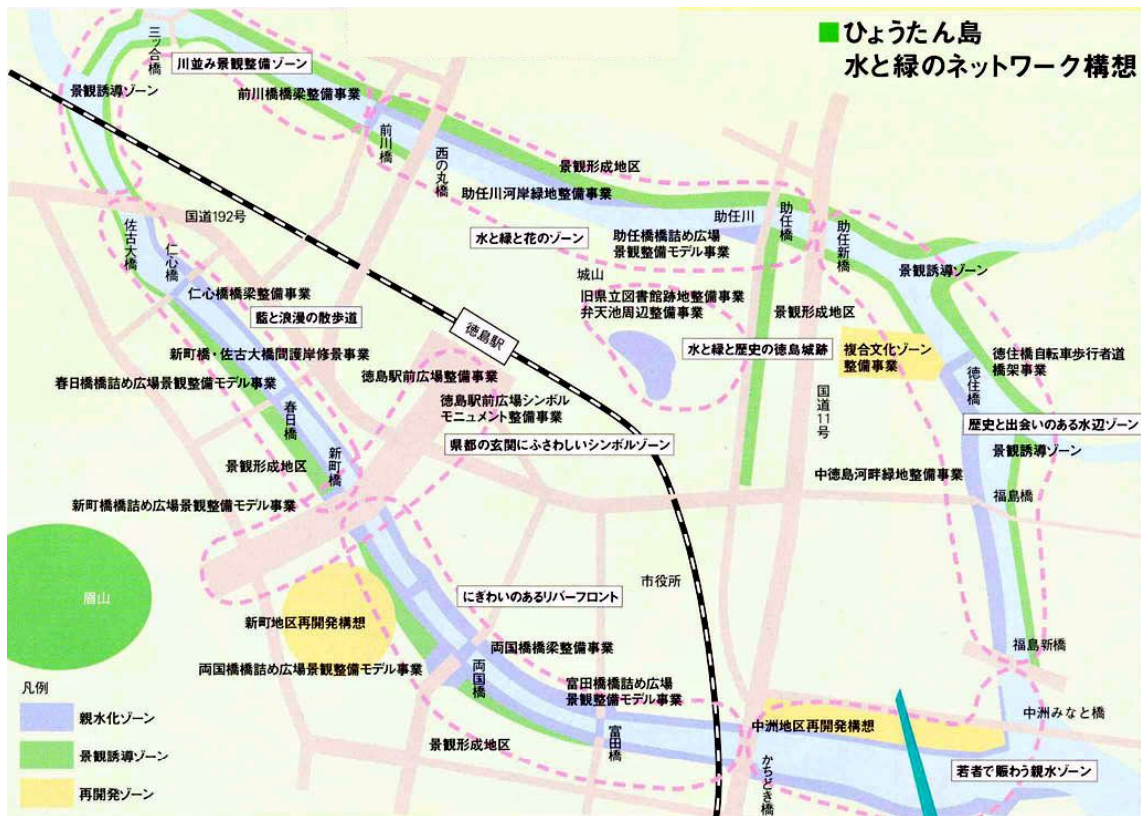
4. 具体策

(1) 行政を中心とした取り組み

新町川周辺ではバブル崩壊以前から、川に背を向ける商業再開発から川を再生させる再開発への方向転換が模索されていた。1986年には市や民間からの寄付金、募金等により「徳島市水と緑の基金」が設立された。翌1987年には新町川が「ふるさとの川モデル事業」のモデル河川に指定され、行政による整備が開始されることとなった。1989年に市政100周年を記念して県と市が新町川北岸に「新町川水際公園」を整備した(国の景観賞を受賞)。さらに1993年に市が「ひょうたん島・水と緑のネットワーク構想」を策定し、親水広場の整備、護岸の親水化、橋の修景など河川空間を生かした個性ある都市環境づくりを行った。



新町川 (左岸:水際公園、右岸:ボードウォーク)



ひょうたん島・水と緑のネットワーク構想 (資料:徳島市)



新町川水際公園 (資料:徳島市)

(2) 協働によるまちづくりへ

1993年の「ひょうたん島・水と緑のネットワーク構想」策定以降、新町川周辺では多様な主体の協働による水を生かしたまち再生が広がりを見せるようになった。特に新町川南岸では景観形成の重要性が認識されるようになり、地元商店街関係者から新町川南岸を整備して潤いある歩行空間を形成する案が出された。川沿いを魅力的な歩行空間として再生させればそこからの人々の回遊により商店街の活気も戻るとの考えからである。

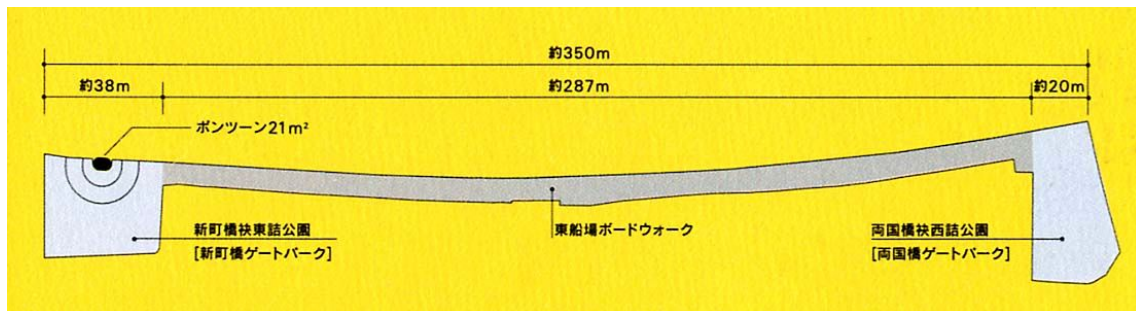
そのような地元の熱意を原動力に、まち再生の「大道具」としてのボードウォークの整備(行政支援の下での商店街によるハード整備)、「小道具」としてのパラソルショップの开店環境整備(商店街の自力による設備整備)、それらの道具立ての上での「演技」としての内外の人々(プロに限らない)による出店、それと並行する形でNPO等による様々な環境整備、というコラボレーションの関係の下でまち再生が進められることとなった。

(3) しんまちボードウォークの整備

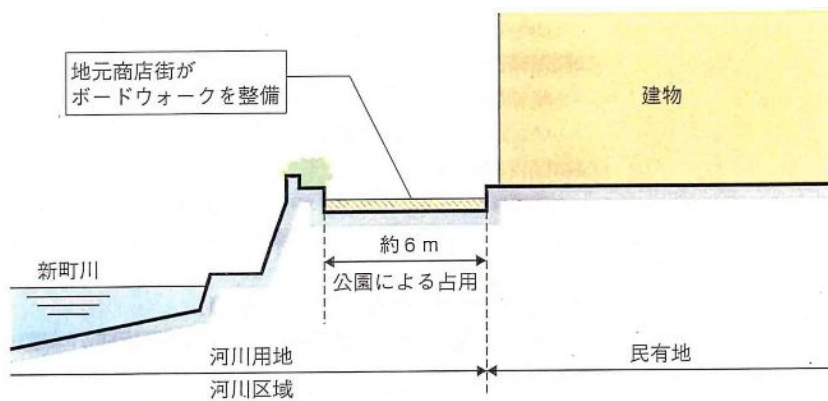
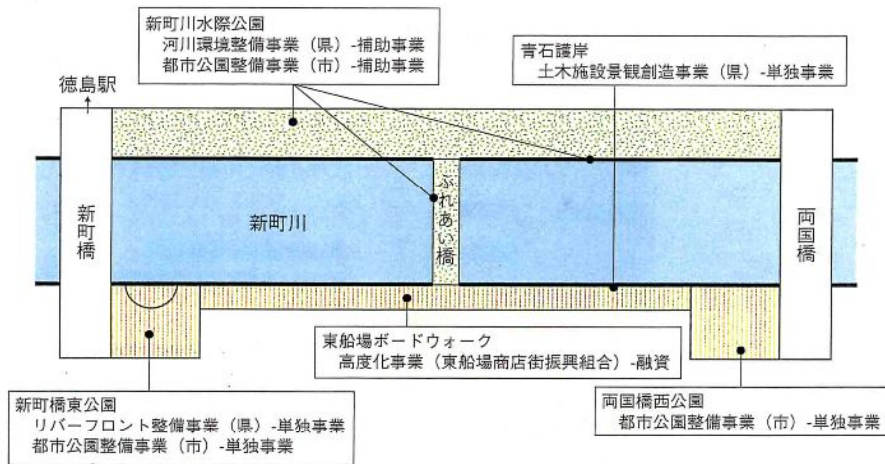
新町川南岸でしんまちボードウォークを整備することを目的として、東船場地区の10商店街が協力して「東船場商店街振興組合」を立ち上げた。そして同振興組合が中小企業総合事業団の高度化資金の融資を受けるとともに国、県、市の補助金も受けつつ、1995年8月にボードウォーク建設に着手、1996年2月に完成させた。これは全長287m(新町橋～両国橋区間、両端の公園を入れた総延長は344m)、幅6～7mの遊歩道であり、街路灯(23基)、ベンチ(6台)等もあわせて整備された。事業費は約1億8,700万円であった(国約4,700万円、県約4,700万円、市約2,800万円、商店街約6,600万円の負担)。1998年には市によりボードウォークの西端に新町橋袂東詰公園が、東端に両国橋袂西詰公園が整備された。

しんまちボードウォークの区域は従前は河川区域の中にあつた県営駐車場であつたことから、その転用を可能にする仕組みづくりに関しては行政のさまざまな支援を受けた。また、高度化資金の融資期間20年に見合った構造とするために木材は耐用年数が長い「イベ材」(南米材)が用いられた。デザインは地元の設計事務所も参加した専門家集団によるものである。

しんまちボードウォークの整備内容は関係者から高く評価され、1998年に「手づくり郷土(ふるさと)賞」(建設省)を、2003年に「都市景観大賞(美しいまちなみ優秀賞)」(国土交通省)を受賞した。



しんまちボードウォーク平面図 (資料: 徳島市)



項目		河川とまちの分担関係
河川区域および権原の設定		<ul style="list-style-type: none"> 河川区域＝河川用地 ＊整備前から約6mの河川管理用通路があり、河川区域が設定されていたが、事業にあたり沿川民有地との境界を全て確定した。(整備前は公営の駐車場として利用)
まちづくり上の区域設定		<ul style="list-style-type: none"> 河川区域内で高度化事業を実施
費用負担	用地費	<ul style="list-style-type: none"> なし
	整備費	<ul style="list-style-type: none"> 東船場商店街振興組合 ＊高度化事業により事業費2億円のうち7000万円の融資を受けた。
	維持管理費	<ul style="list-style-type: none"> 融資償還期間中は東船場商店街振興組合、償還後は市 ＊通常の維持管理にパラソルショップの収益を充てている。
河川区域の占用		<ul style="list-style-type: none"> 市が公園として占用
民間事業者へのインセンティブ		<ul style="list-style-type: none"> ボードウォークが整備されたことにより、河川側から建物への出入りが可能 ＊パラソルショップの出店など、イベント空間として利用可能

しんまちボードウォーク整備概要 (資料:徳島市)

(4) パラソルショップ

1989年に「ラブリバーフェスティバル」等のイベントが始まったが、1998年には明石海峡大橋の開通を目前にして県から観光振興策の一環としてボードウォークにおけるイベント企画作成が東船場商店街振興組合に委託された。同組合は協議の上「しんまち 21 世紀まちづくりユニオン 21」(現在は「しんまち・まちづくりユニオン」)を結成し、ボードウォークにパラソルショップを開くことを決定した。

パラソルはユニオン加盟の商店街が資金を拠出して購入し、準備資金は銀行からの借り入れによった。運営費はパラソル賃貸料や会員の年会費等で捻出した。

パラソルショップは土日及び祝祭日に開催している。初年は明石海峡大橋の開通効果も手伝って市内外から出店希望者があり、用意したパラソル 50 基をすべて設置するほどの大盛況となった(出店料 1 回 3,000 円、現在は 2,000 円)。その後は 10~20 店ほどの出店となっている。パラソルショップは一種のチャレンジショップとしても機能しており、パラソルショップ出店を経て独立した店舗を持つに至った者は市の推定で 20~30 人程度あった模様であるが、その閉店したものもあり、現在市が確認できているものは次の 12 店(12 人)である。



パラソルショップ (資料:徳島市)

- ① 「ラッキーカフェ」(カフェ・クッキー・ケーキ)
- ② 「変な店」(アンティークおもちゃ)
- ③ 「キッチンバー・トニー」(油そば)
- ④ 「プッカ」(オリジナルプリント T シャツ・グラフィックデザイン)
- ⑤ 「アジアモダン」(雑貨・家具)
- ⑥ 「エンジェルス・ダスト」(オリジナル木工製品・雑貨・家具)
- ⑦ 「十八や」(たこ焼き・いか焼き)
- ⑧ 「コアショップ」(韓国食材・韓国雑貨)
- ⑨ 「あなんど」(アジア雑貨・カレー)
- ⑩ 「ダイコク」(カジュアルウェア・HIPHOP)
- ⑪ 「ブレインサイド」(オリジナルステッカー)
- ⑫ 「レイズバー」(BAR)

パラソルショップ出店者数は開始以降減少傾向を辿り、2003 年頃が最も少なくなったが、その後、起業家教育の一環として教育委員会の指導の下で高校生がショップの運営(出資、模擬株式会社設立、仕入れ、決算など)をするようになり、盛り返してきている。パラソルショップから周囲の空き店舗に出店する人もあり、今でもその動きは続いている(海外雑貨を扱う物販店等)。

ボードウォークでは「水際文化村フレンドリー活動推進協議会」(2000 年設立)という組織も活動している(ボードウォークパラソルショップ実行委員会の中心人物が実行委員長)。この組織は若手経営者等の集まりで、ボードウォークの両端の公園等でイベントを実施してまちを活性化させようとしている。

同協議会が毎年行っているものとしては、「ボードウォークカウントダウン」がある。これは市が補助しているもので、1 万人近く人が集まる。2005 年はボードウォーク端の新町橋東公園で大晦日の夜 9 時からバンドコンサートを開催し、11 時 59 分からカウントダウンを開始した。そして午前零時に無料配布のジェットバルーンを一斉に放った。東新町商店街のアーケード内でもこれに連動してイベントを行った。午後 8 時から屋台村 10 数軒を出し、同時刻から新町写真展(商店街の今昔)と一般参加のもちつき大会を開催し、午前零時から商店街ニューイヤー福袋セールを行った。

また、同協議会は 2005 年夏にはボードウォークで阿波踊り連が練習する企画を立てて連に呼び掛け、独自にその企画を実行に移した。連が軽装のまま下駄だけ履いて本番さながらの熱のこもった練習をするもので、通行人や地元の人たちが見物に集まり好評であったことから、毎年実施することになった。同協議会は本番前まで毎日練習してもらうことを目標に連の参加を呼びかけている。

なお、パラソルショップと同時期にスタートした「日曜日」(ボードウォークから 4 キロほど離れた織維団地で実施)は、自動車利用対応型(駐車場がたくさんある)の露天市(120~130 ほどのマスがある)で、プロ(登録業者 1,000 人くらい)が様々な商品を大阪その他から軽トラック等で持ち込んで販売しており、1 万人以上の集客がある。生鮮食料品、電動工具、骨董品などいろいろな物を売っており、パラソルショップはこれと競合関係にある。「まちづくりユニオン」は商店会の理事の集まり

であるため実質的な運営は実行委員会(実態は 1 人で人集めをやって運営)がやっているため、日曜日との差が出ている。

2006 年秋にはようやく TMO が立ち上がる予定になっており、その活動目的のひとつにパラソルショップの運営があるので、今後は商工会議所が力を入れていくことになる。



東新町商店街のアーケード

(5) 新町川を守る会

新町川の荒廃を目前にした住民有志 10 名が 1990 年に「新町川を守る会」を発足させ、自ら川の清掃を開始した。活動を継続するにつれ賛同者を増やし、1999 年には NPO 法人化されて会員数約 300 名の組織にまで成長した。

現在の同会の目的は、新町川周辺の清掃等による河川環境の向上、親しみと賑わいのある水辺空間の創出、河川環境向上・まちづくり推進等に関する調査研究広報等となっている。具体的には当初からの清掃活動を周辺河川や山や海へ拡大した他、シンポジウム等への参加、リバークルージング、ボートレース、リバーサイドコンサート等の実施などを行っている。

リバークルージングは、市が「ひょうたん島・水と緑のネットワーク構想」の一環として行った遊覧船試乗会を継続させる形でボランティアとして行っているものであり(毎日 5 便運行)、賑わいづくりを通じたまち再生に大きな役割を果たしている。この運行の一部は市からの委託によるが、ほとんどは自主的に活動が続けている。

その他、同会は公園の管理に関する業務や「吉野川フェスティバル」に参画するなど、活動の幅を大きく広げてきている。



「新町川を守る会」が運営するリパークルージング

5. 特徴的手法

川を中心に、その親水空間を生かしたまちの活性化に行政、商店街、住民等が協働で取り組んでいる。川辺が人の集まる場所として復活し、新しい人の交流が生まれつつある。

6. 課題

新町川をめぐるさまざまな取組みが功を奏して、駅周辺に集中していた人々の動きが新町川周辺に回遊するようになってきた。それにより新町川周辺の雰囲気も明るいものになってきた。しかしながら、年を経るとともに人の流れの大きさは徐々に小さくなり、パラソルショップ出店者の数も一時は減少傾向にあった。その一方で、ボードウォークの維持管理費用は地元の少なからぬ負担になっている。駅周辺の商業拠点とは異なる新町川周辺独自の魅力をさらに引き出すための試みが期待される。

(参考・引用文献)

徳島市ホームページ

日本施策投資銀行地域企画チーム編著『中心市街地活性化のポイント』ぎょうせい、2001年

日本施策投資銀行地域企画チーム編著『錦おりなす自立する地域』ぎょうせい、2002年

国土交通省都市・地域整備局都市総合事業推進室『「元気なまちづくり」のすすめ』ぎょうせい、2004年